

平成十七年六月、財団法人斯文会 刊。B 6版171頁。

MY古典—親と子の東洋古典教室—というシリーズの一冊として刊行されたもの。このシリーズの刊行者は、今日の日本の現状を憂えて、

「政治の混乱、経済の低迷、学校や家庭の崩壊等、今日わが国はかつてない憂うべき社会状況に陥り、人心の荒廃も目に余るものがあります」と述べ、これを打開するために、「古来日本人の精神を築き上げて来た儒教を主とした古典の意味を見直し、これを人間教育の拠り所とすべきであると考え」て、東洋思想の真の姿を後世に伝えるために東洋の古典を刊行するという。

本書は、王陽明のキーワードとなつている言葉十一を、十二の項目（「抜本塞源論」だけは二つにわけてあるため）として、訓読文こそ載せているものの、一般の人が分かるように平易に解説しており、これを読むことで、王陽明の思想が理解できるようにしてある。「親民（民を親しむ）」「格物（物を格す）」からはじまり、「抜本塞源論」で終わる。この項目に、それぞれ余話がついていて、これは、佐藤一斎、大塩中斎から始まるが、ここにあげられた十人の日本の陽明学者のエピソードを、中江藤樹から西郷南洲まで、時代順にならべると、日本の陽明学簡史を呈しており、陽明学のいい入門書である。

本書の著松川健二先生は、二松学舎大学陽明学研究所長を三年前まで勤められた。その面で、打ってつけの方である。

○小林日出夫 編『陽明学一〇〇のこころ』

平成十六年十二月、未来塾刊。B 6版、263頁。

「リーダー達の行動哲学」というサブタイトルがついているように、編者は、現代の価値観の多様化と道徳観の混乱のなかにある世の中に、次の世代を担う人々のための行動哲学として、陽明学に生きた人の言葉を、〇〇示して、そこに心に適った一言を見つけただけだきたいという。

このような意図のもとに、三十四人の思想家（中国人十八人から五十八、日本人十六人から四十二）の言葉を選んで解説を加えたもの。最後に簡単な研究書案内がある。

言葉の採録に、王陽明から二十五というのは当然として、安岡正篤から十五採られているところに、編者が岡田武彦先生と本書出版について企画した際の思いが読み取れる。

○王暁所・李友学 主編『王学之魂』

二〇〇五年九月、貴州民族出版社刊。A 5版、387頁。

本書は2002年一〇月に、中国、貴州省の貴陽（修文県）において行われた第2回陽明文化節及び陽明學術研討会において発表され、収録されたものに、近年編輯している『貴陽王陽明研究会会刊』の中から選ばれた論文を編集したもので、三十三篇より成っている。編者の王暁所氏は貴陽王陽明研究会会長。

李友学氏は同副会長である。

内容は、次の通りである。

王暁所「良知与和諧社会」（代序）

劉学沫・史繼忠「文化之峰起黔山」

吳雁南「心学大師王陽明」